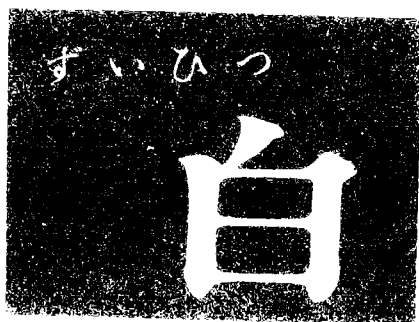


つひいず

白





岡部伊都子

新 潮 社

おひつ白

定価二六〇円

昭和三十四年九月二十六日印刷
昭和三十四年九月三十日発行

著者 岡部伊都子

発行者 佐藤亮一

東京都新宿区矢来町七一
発行所 株式会社新潮社

電話東京(34) 七一―九
振替 東京 八〇八番

乱丁本はお取替え致します。

印刷 塚田印刷株式会社 製本神田加藤製本所
© by I. OKABE 1959. Printed in Japan.

目次

女の目	茉莉花	白い花	松	生姜の花	合歓	今年の桜	花さまざま	ええもん	童子	食べかた	泣き賃	不自由なゴム	右側	おん唇	白	自画像	湿気の国	私の巢
七	七	八	八	九	九	一〇	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一

やさしさ	九
なぞ	一〇四
春愁	一一二
水仙と水がめ	一二七
神戸への旅	一三〇
テレビおむすび	一三三
日々短章	一三九
染め髪	一四一
花の色	一四〇
春寒	一三三
シワ	一三三
姓	一三四
クリップ頭	一三六
明日の運勢	一三七
赤い表紙	一三九
王と庶民	一四〇
誤植	一四三
清さん	一四三
陰湿	一四五

大阪の気品	友	人形	横堀	椎茸	雛	円光	この夫たち	夜	ともに眠る	愛のすがた	ひとりひりひり	吉田先生	ごめんなさいね	ええお子さん	飢餓感	色にいろいろ	錯覚	夢
一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七

装幀

山口源

奈良の面影	三〇三
花は花のみ	二〇五
季情	二〇七
冬の星	二〇七
寒莓	二〇八
五月闇	三〇〇
毛虫	三〇一
螢狩	三〇三
金魚	三〇四
蓮の茶	三〇六
松虫	三〇七
彼岸此岸	三〇〇
殺さるべし	三〇五
あかるい死	三〇六

ず
い
ひ
つ

白

私 の 巢

外出から帰ってきて、自分の部屋のドアを押す瞬間、私はいつも深い呼吸をする。どこの家にもその家独特の匂いがあるように、ドアをあけたときほんのひと息かふた息しか匂わないのだけれども、たしかに私の部屋の匂いがあるからである。

とくべつに香りをくゆらせる工夫をしたことはなく、ただ必要な家具と、僅かな書物と、時には一輪の、時には花がめにあふれるほどの花々とが部屋に在るだけなのに、その中で仕事をし、眠り、客に逢い、ものを食べなどしているうちに、いつとはなしに部屋臭ができてしまったのだ。鼻の利く人間というものは便利なような不便なようなもので、いい香りがすると自分の身体まで美しくなるように幸福だし、いやな香りの中にいるとなにかあましくかなしくなってしまう。自分でつくろうとしてもつくり出せないものだけに、私は自分の部屋がしんめりと重厚な匂いを持っていることにしづかな満足を感じずにはいられない。

美しい香りではないにしても、心落ちつく巢の匂いは、その巢のあるじである私を心から慰める。ここではみように人目を意識する必要もなく、かといって自らにおぼれて泣きしむ甘さはもうない。いわば他人からも自分からも解放されて、伊都子という名からも女という性か

からも離れたひとつの魂が自然な呼吸をゆるされているのだ。演壇にたつてもっともらしく話をしていたり、華かな音楽会やお芝居をたのしんでいたたり、好きな画や仏像に逢ってたんのうしていたり、次から次へと時間に追われくるまで走り回っていたり、あるいは座談会で、あるいはストリートでマイクにむかっていたり、どうしたら出っ歯をうまくごまかせて美しくみせられるかしらと考えながらテレビ化粧をしてもらう自分。右に左に、まるでさばくといった感じに人に応待していたり、ポカんとぬけたような顔をして市電のりばにつたっていたり、ひとりみじめに食堂のすみでぼそぼそ食物をつついていたり、慕わしく思うひとの前にでて一生懸命に入ろうとつとめている私。

みんなへんてこだ。この部屋にひとりでいると、どういうときの私もが、いやににせものめいている。いったいこの、ここにいるのはなにものなのだろう。それはどこからやってき、どういうわけでこのところに存在し、どうなるものなのだろう。この私らしいものの正体を、自分自身がつかめないし、もとよりはたの人が理解できるはずもない。ただ深く実感できるのは、私が形而下の一存在であること、そのおのれのつかみがたなさ、形のなさに途方にくれ、空漠たる気持におそわれるという事実だけだ。孤りになった人間たちでこの思いと対面しているものは多いのではないか。

はづかしいことに、私は少女のころ、ほんとうに自分が肉体を持った人間のひとりであるということを知っていなかった。足で歩き、手で用を足し、食事や排泄を行しながら、どうしてあんなに肉体を意識できなかったのか今もって判らない。入浴しても自分の身体をみるのがい

やで、そそくさと裸の時間を終えていた。豊満な肉体でない劣等感がつよかったためか、五体完全で動きに不自由を感じなかったために、かえって肉体を意識しなかったのだろうか。少女の私に上級生から手紙が届いて「可愛いあなたの唇にキスしたい」と書いてあったのに仰天し、思わず鏡をとってみつめた自分の顔。私はそのときはじめて自分に唇というものがあったのを発見したのだった。

そのためか、娘に成人するにつれて、男性と女性という人間に備わった性がひどくかなしく、電車にのっているときどき車内に二つの性ばかりが詰めこまれているような幻覚におびえたものだ。それは、当時は感覚として連想していただけだが、やがて大人になると、むぎだしの身体が陳列されているようで息づまるおもいのすることさえあった。目はちゃんと品のいい紳士やシックな令嬢、さまざまの人間たちを美しくととのえられた外側の姿でとらえているのに頭にうつるのは二つの性のグロテスクな映像なのである。しとやかそうに澄まして乗っている私がこんな連想をしているなんて、なんといじわるな現実なんだろう……。妄想と闘いながら、つくづくとそうしたあさましい自分の実体を思い知らされたことだった。

しかし、そういうすさまじい連想もしばらくの間で、今では男性をみても女性をみても、その個人の人間としてのうまみ、がどの程度かを一瞬、目で計るだけになっている。美味しく熟した人や、いい本質に恵まれている人はなんとではなく人の心を明るませしてくれるものだ。ところが一度だけ車中ただ、茫々としてつかみどころのない煙ばかりなのにおどろいたことがあった。この形のないもやもやを強く感じたのは今年にはいってまもなくである。生きてゆくため

の喜びを得ようとして、ずいぶん自分に言いかけ、努力に努力を重ねたつもりだが、結局それはまたしても幼いころからの虚無にまい戻り、そのため、他の人々の肉体までもが、急に否定されてしまったのだろうか。これは甚だ意外な体験で、私自身めあたらしい実感だった。これまた視覚にはいろいろな車中の人の姿がハッキリとした色や線で映っているにもかかわらず、そしていくら目をこするようになして見直し、心中に「こんなバカなことがあるものか、これは身体をもった人間たちの集団だよ」と言いきかせても、実感として感じられるのは円いもやもやした煙のマッスばかりだった。車内のどこをみても、人間は灰色のもやもやにかわってしまっていた。

断っておくが私は心靈学に興味をもったことはないし、迷信めいたものには信頼をおいていない。こういうのは一種の精神異常なのであるうか。だが、私には頭痛もなく耳鳴もなく錯覚を起す誘因である懊悩があるわけでもない。至極平静に淡々とした朝の話。睡眠不足だけがもつともとりあげるべき欠陥で、ほかにはとくべつ病氣がある様子はみあたらない。ヒステリーや狂気というものが、案外ひどい我儘な氣持や沈鬱性から発するときいて、純粹性や理想追究への傾倒からでなく單純にヒステリックになるのを恥と思っている。だから他者からみれば單純なことで悩んでいるようにみえても、本人の私にはたいへん重要な根本的意義にまで逆のほつてゐるか、無きか」に苦しんでいるのだ。それも、ほとんどの場面、大きな人間存在というもののへの課題にすりかえて、「存在することのかなしさ」に哀憐することが自然になったので、もう悲喜の激しい感情転換は遠くなつてしまつた。

幼いころは無自覚なエゴで他を傷つけてきた人間は、成長するにつれて自覚を通したエゴで他を傷つけ、他を傷つけたことによって自らも傷つく。いわゆる世の種々相をみつめ、その矛盾や不合理性をよく理解したら、バカげた自己中心主義はなくなるかと思っていたのに、年齢を重ねるにつれていよいよエゴは激しくなりまさり社会や人間に対する嫌悪は絶望を決定的にする。

私はずいぶん人間を讚美し、愛に憧れ、社会に対する誠実や人道的慈愛を尊び書いてきたけれども、心の底を打ち割ってみれば、全く何物をも信じていなかったのではないか。「あなたは甘いね、人の良いところばかりをみようとする」とよくいわれたし、今でもやはり良いところを探してよろこぶたちではあるが、それも、私の気持がやさしいからではなく、まことは人間をいいものとは思わず信愛していないので、何とかすこしでも良い方にとって、自分の生き易くあやしたかったのではなからうか。平気で他人の向うずねを叩きわり眉間をつきさせる人は、本来は気が良くて、人間そのものを愛しているからこそ安心してそういうやり方ができるのだろう。

嫌悪と虚無のただ中に漂う自分の魂、そしてそれに近づき遠のくいろいろな魂。肉体が魂の表現体であり、魂は生きた脳の思考する中に在ることを思うと、人間が茫々とした煙のマッスに感じられることもあながち狂気だとは言いいまい。そういうばこのごろでは、客と話をしているもふつとその空漠感が身にしみてくる。対座している人も自分も、この部屋に在るのはなく互いに相手にもの言っているのではなく、^{くう}空に浮遊しているという思いである。

この私の巢をたずねられるのは、義務的な来客や、仕事のために来訪する方をのぞくと、たいていは何か心にわだかまりをもつ人々だ。五年越しの恋人との結婚を母に拒まれモタつている間に、恋人が他の男性と結婚してしまった話。三つ姉女房としていっしんに夫を愛してきた美しい女性の若い夫は、恋愛結婚で式をあげたあとも正式の届出をせず、独身男性としての他の女性とつき合っていた。妻の働きでの生活をしたあと、さて自分も定收を得られるようになると妊娠した妻にそれを強いておろさせ離婚を承知せよといって暴れまわる話。若い坊さまに年上の女性から求愛の手紙がきた話。妻子ある人を恋して苦しむ話、夫の帰宅が遅く、封建的な考えに従わねばならぬ生活に心かわく話、毎日の仕事に倦怠をおぼえ劣等感にさいなまれる話、病気で入院中の病室へ、偶然前の夫の娘が自殺未遂で運びこまれ、病院中に居る場所がなくて廊下で立ちすくみ泣いてしまったというあわれな話……。

どんなに身につまされても、このごろはめったに頬には涙流れず、肋骨の裏に涙のしたたるのを覚えるだけだが、どういう場合にも、いい加減にはむかえない。そのひととき、その人と一緒に話ができることを、たいせつにたいせつに考え、もはやこういう時間は二度とはあり得ないという背水の覚悟で、せいじつぱいに正直な言葉を話している。そのため、お一人に三時間、四時間、ときには九時間ほども時間をうばわれ、あとでぐったりすることが多い。仕事にかけねばならぬ時間とエネルギーがすっかり失われて、何にも書けず、それにいらだつこともたびたびだが、そんなとき「だがまで、書くことと、この一人の人にしっかり立ちむかうこと

と、どちらがより本質的な在りかただかはわからないではないか、最後までつき合い切れぬような対い方で、気がすむというならべつだけれど」と自分に言ってきた。

ときどきインタビューに多人数でたずねてくる中学生や高校生など、ういういしい来客の場合はいっそう慎重で、気持のいいひとときでありたいと願う。そういう幼じみた人々の心には、こうしたときの初印象が非常につよくのこるからだ。それはある意味で、私の指がその人々の心のヒダに何かひとこと書きのこすことでもある。だから私はその年代に戻ったようになって話すし、間ちがったときはすぐ「ごめんなさいね」とあやまる。大人には言葉の意味を複雑に理解してもらえても、うら若い心は傷つき易い。

身動きならぬ貧困と病苦に自殺への衝動を訴えるひと、私のうつろな心の箱に美しいものをいっぱい詰めるようないきおいで労働歌を歌ってきた若いひとたち。組合活動をしようと思うとアカだといわれてたじろぐB・G、長く一緒に暮して私の気むずかしさも醜悪さもよく知っている前のお手伝い嬢が何かと顔をみせにくるのも、しとしと気持をやさしくさせられる。私はえらそうに、わが巢を訪れる人々に一生懸命親切にしていると思ってくれど、むしろ私の方がそれらの人々によってあたためられていることはたしかだ。そして、私の心にとがめて仕方がないのは、そうした人々を裏切っているという気持だ。

何や彼と心のうちを打ち明けてむかって下さる人々に一応まともなことは言いながら、私は自分のいちばん大事な心のうちを誰にも明さない。これまで、折々の苦痛にしても喜びにしても、誰にも言う気はしなかったし、今到達したひとつの思いも「いちばんいいこと黙っていよ

う」という気もちである。

考えてみればどんな率直な身上相談でも、話せない事は伏せてのその人にとって都合のいい部分的発表にしか過ぎない。だから自ずと理解に制限があるわけだが、ほんとうの理解は話せないことがたくさんあると知った上での思いやりにのみ可能だろう。私だって、私のすべてを語り明したひとはひとりもないし、これからだって言い得るとは思わない。つくづくと「いろんなことを書いたり言ったりしてきたけれど、いちばん苦しいこと、いちばん嬉しいこと、いちばん大切なことは何にも言わなかった。言わないでもいいことばかりザワザワ言ってきたのね」という気がする。

ソファに五人、小椅子に二人としか席はない小さな部屋だから、八人以上の客となると板の上に座ぶとんをして坐ってもらう。学生さんだと「靴の臭いでくさいでしょう」と客の方で気を使って窓を開ける。人いきれでむんむんすることがあっても、それはそれで部屋は満腹のよろこびにおいたっているのだ。「私の裏切りを……どんな裏切り方をしてもかんにんしてちょうだいね」という声にならぬ声をのみこみながら、私の巢に寄る人々にむかうのである。中には私の部屋にはいる瞬間、部屋の匂いをふっと感じてそれを時々懐かしく思ってくれる人もいるであろうか。私の好きな匂いを醸してくれる部屋が、客去りしのちの孤り居にしみじみいとおしく思われる。